

# 危機感持ち「備災」を

災害前に何を備え、災害時にどう行動するのか。防災・危機管理ジャーナリストの渡辺実氏が「天地動乱の時代をどう伝えるか? 『災害報道』で生命を救う!」と題して6月下旬、帯広市内で講話した。昨年の熊本地震を例に、十勝で起こり得る大地震に備える大切さを訴えた。要旨を紹介する。

(高津祐也)

私は「備災」という言葉を作った。従来は「防災」、阪神・淡路大震災の後に「減災」という言葉が生まれたが、どうも近年は「防ぐ」「減らす」なんて言っている場合ではない。地震や崖崩れに水害」。私たちは天地動乱の時代に生きています。災害に備えるという哲学を、国民は持たないといけない。

災害は歴史的に繰り返す。東日本大震災が1000年に1度といわれたのは過去に似たような地震と津波が起きているから。869年の貞観地震。この地震を挟んで9世紀後半には日本列島はさまざまな天災に見舞われた。阪神大震災や新潟中越地震など、過去のものと対応する災害は起きており、「富士山噴火」「関東地震」「西日本(南海)

## 防災ジャーナリスト 渡辺実氏が講話

地震」に、対応する地震はまだまだ起きていない。東日本大震災の前後を含む過去20年間の日本列島の動きをみると、東北地方が東南方向に引っ張られている。中国地方が時計回り、北海道は反時計回りに地殻変動しており、列島全体にひずみがたまっている。東北3県(岩手、宮城、福島)ではまだ変動しているが、その動きは鈍化し、次の地震に向けてエネルギーをため始めたということだ。

熊本の災害は風水害が多  
水の備蓄は、最低限1日

く、地震が起る想定がなかった。そして、2回の震度7の巨大地震に見舞われた。九州には多くの活断層が走っていて、十勝にある活断層とも非常に似ている。一連のシナリオを十勝にも、当てはめられるという危機感を持ってほしい。被災者になる前に知って置くべきことは「災害対策基本法」「災害救助法」「被災者生活再建支援法」の3つの法律。建物被害の「応急危険度判定」は二次被害防止のために、行政が一方的に評価するが、全壊や半壊などを判定する「被害認定調査」は被災者の申請主義で、権災(りさい)証明書の発行につながる。

日本の災害対策で最も遅れているのがトイレ。家庭用の災害対策トイレもあるが値段が高い。猫のトイレの砂は給水力、脱臭力が抜群。この砂とごみ袋があれば、簡易トイレが作れる。知識は頭で分かっている意味ない。一つでも行動して「自分ごと」にすることが大切。これで人の命が助かる。ぜひ「備災」を実行してほしい。



「備災に向け行動を」と呼び掛ける渡辺氏

ライフ

暮らし

